

釜田 (旧姓・児玉)悦子さんは、昭和19年4月満州生まれ。2歳で日本に引き揚げ、小学校2年生のときに水俣市にやってきました。

「母が幼稚園の送り迎えをしてくれたのが、最初に残っている記憶です」と悦子さんは話します。4歳のときの記憶がいまだに残っています。小学校では、走るのが速かった悦子さんは、クラス対抗リレーでは常に注目の的でした。好きな科目は、国語、算数、図工に家庭科と幅広く、編み物も得意で、マフラーを好んで編んでいました。

中学校では、陸上部から誘いを受けるもそれを断ります。それは、母が営む駄菓子屋の店番をするために部活はしないと決めていたからです。店番のお駄賃としてもらえる10円分のお菓子(当時としては高価)がとても楽しみな女の子でした。

そろばんを小学校4年生から習っていた悦子さん。高校は、鹿児島県の出

テニスに明け暮れた毎日でした。初恋もこの頃でした。相手はテニス部の2つ上の先輩。しかし思いを伝えることなく、悦子さんの初恋は終わります。雪のように溶けてしまった淡い初恋でした。

そして、高校を卒業し、母から家から通えるところに就職してほしいと頼まれた悦子さんは、高校生のときにアルバイトをしていた地元の会社に就職しました。本当はタイピストになりたかった夢を持っていましたが、その会社で5年間働きました。そして23歳のときに範義さんと出会うきっかけが訪れます。

範義さんの叔父は、悦子さんの母校の先生でした。先生とは、3年間同じ

かまたえつこ 釜田悦子さん(杉水)

編み物が大好きだった

水市立商業高校に進学させてもらいました。当時は、中学校卒業後に就職する人も多かったのですが、親に無理を言っていて、高校に進学させてもらったことは、今でも感謝しています。その感謝の気持ちが高校での3年間皆勤賞という結果に現れているのでしょうか。

水俣から電車で通学し、友達に誘いでテニス部に入部した悦子さん。高校生から始めたので、昔からやっている人とのレベルの差に苦しみました。持ち前の根性で3年間続けました。その結果、3年生の時には部長を任せられる程になりました。3年間、勉強と

少女は妻になり、母になった

平成6年11月7日早朝、釜田悦子さんは夫の単身赴任先で突然倒れます。脳梗塞一。幸いにも命は取り留めましたが、それから16年以上、悦子さんは後遺症と付き合っていくこととなります。今月号の特集は、一人の命に触れることで、そこから何を思い、何ができるのかを考えてみます。皆さんも一緒に考えてみてください。



埼玉に新居を構えたときの範義さんと悦子さん
当時30歳と23歳だった2人の顔は夢に満ちあふれていた

電車ですべて通っていました。きっかけは、その先生から紹介されたことでした。範義さんは、東京に住む7つも年上の人です。恋愛という恋愛もしたことがなかったのに、結婚なんて。不安が無いと言えは嘘になります。悦子さんは、決心し「しよんなかけん行って」と話し、範義さんと会うことにします。水俣市の駅通りにある喫茶店「きくや」で会う2人。悦子さんの第一印象は「真面目そうな人だなあ」。ただ一回会っただけで結婚の話は進み、8カ月後に2人は結婚します。それは昭和43年2月11日のこと。今から43年前のことでした。

熊本から東京に嫁いだ悦子さんは、1年後に長女を出産します。その後、埼玉県川越市に家を建て、2年後には次女、またその2年後には三女を出産し、3人の子どもに恵まれ、幸せな家庭を築きました。範義さんは出張も多く、家事や子育てには苦労することもありました。

範義さんと、関東にいてもいずれば熊本に帰ってくることを約束していた悦子さん。そのときに飲食店を始めることができるようにと調理師学校に通います。その調理師学校の1年間を悦子さんは夢のようだったと語ります。

仲間とともに勉強に励み、時には旅行に行くことも。まるで学生生活に戻ったような楽しさは、結婚してから家事や子育てに頑張ったからこそ、その時間が輝きを放っていたのでした。そして、悦子さんと子ども3人は、昭和54年、水俣市に戻ってきます。範義さんは、仕事の引き継ぎを終え、半年後に水俣に来ました。しかし、就職先は熊本市。単身赴任での生活が続きました。その後、家族で熊本市に移りました。悦子さんは食堂をオープンします。お好み焼きと定食の店「味里」は8年間営業を続けました。悦子さんの体調が悪くなったこともあり、閉店したのですが、8年間続いたお店が繁盛していたことは想像に難くありません。平成元年にお店を閉めてからは、化粧品販売などを行っていましたが、範義さんは大分に単身赴任。仕事をしながら、休みの日には範義さんのアパートに行き、洗濯や掃除などをしていました。

そして、平成6年11月7日がやってくるのです。

結婚して、関東へ――



水俣市にあった喫茶「きくや」(写真は昭和50年頃)今はもう取り壊され、建物は残っていないが、2人の思い出として、ずっと壊れずに残っている